

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04423

研究課題名(和文) 共通教材を活用した日本、韓国、台湾の教員養成における市民的資質の育成

研究課題名(英文) Cultivation of civic qualities in teacher training in Japan, Korea and Taiwan using common teaching materials

研究代表者

真島 聖子(MAJIMA, KIYOKO)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10552896

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、日本と韓国の教員養成に焦点を当て、市民的資質を育成する共通教材を作成し、相互交流学習会を通して学び合う国際交流プログラムを開発したことである。共通教材の開発にあたっては、日韓の歴史から学ぶ「徳川時代の平和外交 朝鮮通信使」をテーマに「朝鮮通信使屏風図」を取り上げた。また、日韓両国で共通する現代的な教育課題として、「いじめ」と「塾」に焦点をあて、それぞれの国の現状や社会的背景、共通点と相違点について明らかにしながら教材化を試みた。この共通教材を活用して日韓の教員養成の学生が共に相互理解を深めながら学び合う国際交流プログラムの効果について、アンケート調査をもとに考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、3つある。第1に、日韓の教員養成の学生が、共通教材を活用して、日韓の歴史や教育問題について学び合うことで、共通のテーマでも、異なる観点からの問題解決が可能になることに気づき、相互理解が深まることを明らかにした点である。第2に、共通教材を作成する際には、地域性や学生の問題意識、興味関心を考慮してテーマを設定し、相手への問いかけや根拠となるデータを提示することによって、問題を掘り下げて考えることができることを明らかにした。第3に、市民的資質を育成するためには、環境を整え、示唆を与え、気づきを促し、自分の頭で考えて判断し行動できるように支援することが大切であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The result of this research is to develop an international exchange program focusing on teacher training in Japan and Korea, creating common teaching materials to foster citizenship and learning through mutual exchange learning sessions. In developing the common teaching materials, we have taken up the "Korea Communications Envoys Screen" under the theme of "Peace diplomacy in the Tokugawa era-Korea Communications Envoy" learned from the history of Japan and Korea. In addition, we focused on "bullying" and "cram school" as common educational issues common to Japan and South Korea, and tried to make them teaching materials while clarifying the current situation, social background, common points and differences of each country. Based on the questionnaire survey, we examined the effects of the international exchange program in which Japanese and Korean teacher-training students learn by deepening mutual understanding by using this common teaching material.

研究分野：社会科教育

キーワード：市民的資質の育成 教員養成 日韓交流 共通教材 国際交流プログラム 相互交流学習会

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、これまでの自身の研究成果⁽¹⁾としてその有効性が確認された日本の判決書教材をベースに、韓国、台湾の教員養成大学と連携し、相互に活用可能な教材を開発することを目指していた。日本の判決書を教材化した先行研究には、梅野正信氏による一連の研究があげられる⁽²⁾。一方、歴史をテーマにした共通教材に関する代表的な研究として、歴史教育研究会による日韓交流の歴史を教材化した研究⁽³⁾や日韓共通歴史教材制作チームによる研究⁽⁴⁾、日中韓3国共通歴史教材委員会による東アジア3国の近現代史をテーマにした歴史教材研究⁽⁵⁾や東アジア共通教材作成のための論点やプロセスを紹介する山口剛史氏の研究⁽⁶⁾があげられる。

上記の先行研究に学びながら、より実践的なアプローチから、日本と韓国の教員養成の学生が共に学べるテーマについて検討を積み重ね、それぞれの国の現状や社会的背景、共通点と相違点について明らかにしながら、教材化を試みることはできないかと考えた。また、この共通教材を実際に活用して、日本と韓国の教員養成の学生が共に相互理解を深めながら、市民的資質を育成する国際交流プログラムを開発できないか思案した。

2. 研究の目的

急速な勢いでグローバル化する社会では、複雑で相反する多様な価値観が存在する中、事実を丁寧に理解した上で、相互に寛容な姿勢をもって接することがすべての成員に求められる。とりわけ、次世代の市民を育てる学校教育においては、人権感覚や市民的資質を備えた教員の育成が不可欠となっている。本研究は、このような視点から、日本と韓国の教員養成において、共有可能な社会的課題に関する共通教材の開発、市民的資質を育成する国際交流プログラムの開発をめざすものである。

3. 研究の方法

(1) 社会的課題に関するアンケート調査

日本と韓国の高校生や大学生を対象に、日本と韓国で共通する社会的課題についてアンケート調査を実施する。また、必要に応じて、インタビュー調査を行い、社会的課題の解決策についての考えを調査する。

(2) 共通教材の開発と授業実践

日本と韓国に共通する社会的課題について、アンケート調査やインタビュー調査をもとに、共通教材を開発し、日本と韓国の高校生や大学生を対象に、共通教材を活用した授業実践を行い、その効果を検証する。

(3) 国際交流プログラムの開発

韓国の晋州教育大学校と日本の愛知教育大学との国際交流プログラムを企画・運営し、学生の相互交流や相手国の附属小学校で授業実践を組み込んだプログラムが、どのような市民的資質を育てているのか、学生の学びを記したレポートやアンケートから明らかにする。

4. 研究成果

(1) 社会的課題に関するアンケート調査の結果

日本の大学生を対象に、日本と韓国が抱える社会的課題についてアンケート調査を行った。日本の大学生は、日本と韓国で共通する社会的課題として、歴史認識問題や慰安婦の問題、領土問題などを取り上げるとともに、少子高齢化の問題、女性の社会進出と育児や家事の両立、経済のグローバル化や格差の問題、子どもの貧困の問題などに関心が高いことが分かった。

2016年1月21日～24日には、韓国の光州東亜女子高等学校で韓国の高校生を対象に、韓国と日本が抱える社会的課題についてアンケート調査とインタビューを行った。インタビュー調査の結果から、韓国と日本で共通する社会的課題として、少子高齢化の問題、女性の社会進出と子育ての両立、若者の就職難、貧困と格差問題などの関心が高いことがわかった。また、韓国の高校生の政治意識が高く、現政権を批判する声も多かった。韓国国内の歴史教科書国定化に対しては、実際に不満を抱く高校生が多いことが分かった。

(2) 共通教材の開発と授業実践

共通教材の開発に当たっては、共通教材のテーマとして「徳川時代の平和外交 朝鮮通信使」を取り上げた。豊臣秀吉の命による2度にわたる朝鮮侵略は、朝鮮に暮らす人々に多大なる被害と犠牲を与え、国土と文化を破壊し、朝鮮と日本の関係を悪化させた出来事である。しかし、対馬藩の努力により、江戸時代には、捕虜の返還から関係修復を重ね、やがて、将軍の代替わりに祝賀使節を送る朝鮮通信使として、江戸の文化や学問にも影響を与え、朝鮮と日本の平和を維持する重要な役割を担った。このようなテーマでの共通教材は、愛知県と晋州との歴史的な関連も深く、愛知教育大学と晋州教育大学校の学生が共に学ぶ教材としてふさわしいものであると考えた。教材化にあたっては、2019年5月、名古屋市中区橋にある崇覚寺の住職の協力を得て、

崇覚寺に伝えられている「朝鮮通信使屏風図」を実際に見せていただいたり、住職から「朝鮮通信使屏風図」にまつわるお話を伺ったりすることで、日韓の教員養成の学生が共に学べる機会を設定した。

この他、2019年8月には、日韓の学生が共に学び、市民性を深める共通教材を作成するために、実際に日韓の教員養成の学生に事前にテーマに関する調査を行った。複数のテーマに関する候補の中から、最終的には、日韓両国が共に抱える教育的・社会的課題として、日韓両国で現在問題となっている「いじめ」と「塾」に焦点をあて、それぞれの国の現状や社会的背景、共通点と相違点について明らかにしながら、教材化を試みた。

(3) 国際交流プログラムの開発

韓国の晋州教育大学校と日本の愛知教育大学との国際交流プログラムを企画・運営し、学生の相互交流や相手国の附属小学校で授業実践を組み込んだプログラムが、どのような市民的資質を育てているのか、学生の学びを記したレポートから明らかにした。日韓の教員養成の学生が、共通教材を活用して、教育問題について学び合うことで、同じ教育の問題でも、異なる観点からの問題解決が可能になることに気付き、相互理解が深まることを明らかにした。また、共通教材を作成する際には、学生の問題意識や興味関心を考慮してテーマを設定し、相手への問いかけや根拠となるデータなどの提示によって、問題を掘り下げて考えることができることを明らかにした。さらに、日韓の歴史認識問題や外交問題で関係性が悪くなった時でも、共通教材を活用した国際交流プログラムを通じて対話の糸口をつかめることが明らかになった。

(4) 相互交流学習会の実施

国際交流プログラムは、2019年8月27日～9月3日、愛知教育大学の学生11名と晋州教育大学校の学生12名が参加し、韓国晋州教育大学校での「相互交流学習会」と晋州・統営・釜山でのフィールドワークが中心となるプログラムである。国際交流プログラムを実施した時期は、日韓両政府の関係が悪化し、当初予定していた晋州教育大学校附設初等学校での交流や授業実践が中止となった。そこで、小学校での授業実践の代わりに、大学生の相互理解を深めるための学習会を開くことを教師から提案し、愛教大の学生が設定した複数のテーマをもとに晋州教大の学生が話し合っ、相互交流学習会の共通テーマとして「塾」と「いじめ」を選択した。それぞれ、事前にテーマについてプレゼンテーションができるように準備を行い、8月28日に「塾（私教育）」について、8月29日に「いじめ（学校暴力）」をテーマに相互交流学習会を開催した。相互交流学習会の進行は、まず、愛知教育大学の学生がプレゼンテーションを行い、次に晋州教育大学校の学生がプレゼンテーションを行い、その後、日韓の学生が混在した3つのグループに分かれてテーマについてのディスカッションを行い、最後にグループの代表が全体に報告するという流れである。学習会を終えて、晋州教育大学校の学生Aは、「初めて学習会を開くという話を聞いたとき、心配を含む否定的な考えが先に浮かびました。学習会の前提は討議と討論で、このために一番基本となる言語による意思疎通が難しいと思ったからです。でも今は違う考えです。日本の友達とお互いの考えを分かち合いながら同じ状況についても文化の差を感じられたし、それで相手の文化に対する理解もできました。日本と韓国が直面した共通問題と共通する状況について、お互いの考えを共有できる時間になって、考える時間を持つことができ幸せでした」と感想を述べた。

(5) 国際交流プログラムのアンケート調査の結果

愛知教育大学学生9名（学部1年生4名、学部2年生3名、学部3年生1名、学部4年生1名）を対象に、アンケート実施した。事前：2019年8月2日～9日、事後：2019年9月4日～14日である。アンケート項目は、全部で23項目、JASSO（日本学生支援機構：海外留学支援制度）が実施するアンケート項目から抜粋した。アンケート方法は、5件法で、事前と事後で調査し、学生が直接エクセルファイルに入力した。回答項目は、5：強くそう思う、4：かなりそう思う、3：少しそう思う、2：どちらとも言えない、1：そう思わないである。アンケート調査の結果は、表1にまとめた。事前と事後の数値は、平均値である。アンケート調査の他、参加学生11名を対象に、8日間の交流の振り返りのレポートの作成を依頼した。アンケート調査の考察では、国際交流プログラムに参加した学生の市民的資質の向上について整理した。

表1 アンケート調査の結果

	質問内容	事前	事後	増減
1	不十分な外国語力であっても何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる	2.9	4.7	+1.8
2	自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる	2.4	4.0	+1.6

3	仲間に働きかけ、問題点を一緒に改善するために行動することができる	2.4	3.9	+1.5
4	語学の勉強へのモチベーションがある	3.1	4.6	+1.5
5	政治・社会問題・国際関係について知識・関心がある	2.7	4.2	+1.5
6	既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい考えで意見やアイデアを工夫して提案できる	2.4	3.8	+1.4
7	留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある	2.4	3.8	+1.4
8	自ら目標を設定し、失敗を恐れずに粘り強く行動することができる	2.6	3.8	+1.2
9	リスクがあっても挑戦してみる事が大切だと考え、実行することができる	2.8	4.0	+1.2
10	相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる	2.6	3.7	+1.1
11	自分なりに現状分析をして課題点を具体的に提示することができる	2.7	2.7	+1.0
12	自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるように的確に伝えることができる	2.6	3.6	+1.0
13	ストレス状況に置かれても、自分の成長機会だとポジティブに捉え、前向きに対処することができる	2.3	3.3	+1.0
14	自分の文化背景と異なる場所または仲間とでもリーダーシップをとることができる	2.1	3.1	+1.0
15	国内・海外を含めて外国人との交流がある	3.2	4.2	+1.0
16	課題に向けた解決プロセスを考え、計画的に実行することができる	2.4	3.3	+1.0
17	自分の意見ややり方に固執せず、相手の意見や立場を尊重して柔軟に対応できる	3.0	3.9	+0.9
18	チームで仕事をするとき、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる	2.9	3.8	+0.9
19	自分とは異なる信仰や文化的背景を持っている人を理解して受け入れることができる	3.9	4.7	+0.8
20	その場のルールや手続きに従って、自らの行動や発言を適切にすることができる	2.7	3.4	+0.7
21	専門分野の勉強のモチベーションがある	2.8	3.2	+0.4
22	将来の方向性、進路について明確な考えを持っている	2.9	3.3	+0.4
23	社会での男女共同参画（男女平等）の重要性を認識している	3.3	3.6	+0.3

(6) 国際交流プログラムのアンケート結果の考察

アンケート調査の結果と参加者のレポートから、国際交流プログラムに参加した学生の市民の資質の向上を以下の1)~9)に整理することができた。

1)積極的に発信できるようになった

「(1) 不十分な外国語力であっても何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる」2.9 4.7 (+1.8)(愛教大1年B)「韓国チームの学生が、挨拶はもちろん、感謝の気持ちや自分の意見などを口に出して相手に伝えるのを見て、日本とは違う良い文化だと感じたと同時に、自分たちも見習うべき姿だと思った。研修中は、積極的に感謝の気持ちや自分の考えを口に出して伝えるように心掛けていた。」

2)自ら課題を発見し取り組む力が高まった

「(2) 自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる」2.4 4.0 (+1.6)(愛教大4年K)「メンバーの個性を理解するための時間として、毎日の反省会は大きな意味があったと考える。私自身が感じたことをアウトプットする場としても貴重な時間だった。その日に何を学び、明日にどうつなげるかを考えることは、毎日を前日と比較しながら行動でき、一日をしっかりとした目的をもって過ごせていたため、より学びの多い一週間となったのだと感じている。」

3)仲間との協働性が高まった

「(3) 仲間に働きかけ、問題点を一緒に改善するために行動することができる」2.4 3.9 (+1.5)(愛教大1年B)「韓国チームと日本チームのリーダーを見て、自分のチームに対する貢献の仕方についてとても考えさせられた。チームとして、各々が得意なことを活かして貢献していくことが大切なのだと思った。」

4) 語学を学ぶモチベーションが高まった

「(4) 語学の勉強へのモチベーションがある」3.1 4.6 (+1.5)(愛教大2年G)「この日の反省会で、自分の言葉で素直な気持ちを伝えることが、自分たちのために必死に動いてくれたり、たくさん気を遣ってくれたりする韓国人メンバーに少しは恩返しできるのではないかと、という考えが出たため、もっと多くの言葉を覚えていこうと思った。」

5) 政治・社会問題・国際関係への知識・関心が高まった

「(5) 政治・社会問題・国際関係について知識・関心がある」2.7 4.2 (+1.5)(愛教大2年G)「ニュースで報道されているのはほんの一部で、実際に行ってみるとそのような雰囲気は全く感じられなかった。それどころか、たくさんの方の温かさを感じた一週間であった。国と国はいがみ合っているかもしれないが、大切なのは、人と人のつながりであると改めて考え直すことができた。」

6) 意見やアイデアを工夫して提案できるようになった

「(6) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい考えで意見やアイデアを工夫して提案できる」2.4 3.8 (+1.4)(愛教大4年K)「日本チームのみんなは、全員が十人十色のいいところをもっていた。研修が進んでいくにつれて、お互いに影響しあいながらチームとしてまとまっていったように感じる。それは、チームのなかでメンバーの個性がわかってきて、それぞれのいいところが生かせるような環境になっていったからだと思う。」

7) 社会・習慣・文化に関する知識が高まった

「(7) 留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある」2.4 3.8 (+1.4)(愛教大1年B)「日本で調べるだけではわからない韓国の塾やいじめの現状、韓国と日本の違いを詳しく知ることができてよかった。日本と韓国の文化の違いを知り、驚いたと同時に、その背景についてもっと知りたいと思った。学習会を通して、将来教育にかかわる仕事をする立場として、もっと日本の教育に対して関心を持ち、積極的に調べていかなければならないと感じた。」

8) 交流を通してさらに寛容性の態度が強まった

「(8) 自分とは異なる信仰や文化的背景を持っている人を理解して受け入れることができる」3.9 4.7 (+0.8)(愛教大4年A)「今回の研修期間は、私にマイノリティを経験させてくれる貴重な時間となりました。現在、愛知県は全国で一番、外国人児童が多いといわれています。将来教壇に立った時に、多様なマイノリティの存在に気付き、声掛けのできる人間に一歩近づいたと思います。」

9) 交流を通してリーダーシップをとることに少し自信を持つようになった。

「(9) 自分の文化背景と異なる場所または仲間とでもリーダーシップをとることができる」2.1 3.1 (+1.0)(愛教大2年F)「反省会では、自分が気づけていなかった自分の行動やグループの行動を知ることができました。自分はチームにとって影響力のある人間だから、チームの中で見本にならなければならないし、考えて行動しなければならないと思いました。」

国際交流プログラムに参加した学生は、自分がどのようにしたら自分自身を成長させることができるのか、仲間や周りの人の姿を通して、自分自身を見つめ直し、自分自身を知ることができた。また、日韓の相互交流を通して、分かり合うことの難しさと分かり合うことの大切さを経験と思考を通して実感することができた。市民的資質を育成するためには、環境を整え、示唆を与え、気付きを促し、自分の頭で考えて判断し行動できるように支援することが大切である。

< 引用文献 >

- (1) 真島聖子、判決書教材を活用した人権教育カリキュラムの開発研究、若手研究(B)、2010-2013、研究課題/領域番号 22730688。
- (2) 梅野正信・采女博文、実践いじめ授業 - 主要事件「判決文」を徹底活用、エイデル研究所、2001。梅野正信・采女博文、実践ハンセン病の授業 - 「判決文」を徹底活用、エイデル研究所、2002。梅野正信、いじめ判決文で創る新しい人権学習、明治図書、2002。梅野正信、裁判判決で学ぶ日本の人権 - 中学高校授業づくりのための判決書教材資料、明石書店、2006。
- (3) 歴史教育研究会(日本)歴史教科書研究会(韓国)、日韓歴史共通教材 日韓交流の歴史 先史から現代まで、2007。
- (4) 日韓共通歴史教材制作チーム編、日韓共通歴史教材 朝鮮通信使 豊臣秀吉の朝鮮侵略から 友好へ、明石書店、2005。日韓共通歴史教材制作チーム編、日韓共通歴史教材 学び、つながる 日本と韓国の近現代史、明石書店、2013。
- (5) 日中韓3国共通歴史教材委員会、日本・中国・韓国 = 共同編集 未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史、高文研、2005。日中韓3国共通歴史教材委員会、第2版 日本・中国・韓国 = 共同編集 未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史、高文研、2006。
- (6) 山口剛史、平和と共生をめざす東アジア共通教材 歴史教科書・アジア共同体・平和的共存、明石書店、2016。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 真島聖子
2. 発表標題 The State of and Issues of Entrepreneurial Education in Japan
3. 学会等名 ACISSA(Annual Conference International Social Studies Association) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 真島聖子
2. 発表標題 社会的課題に関する日韓共通教材の開発研究
3. 学会等名 日本社会科教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 真島 聖子 梅野 正信
2. 発表標題 教員養成におけるいじめ判決書を活用した授業の可能性と課題 - 市民的資質の育成に焦点を当てて
3. 学会等名 日本教育実践学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 真島聖子
2. 発表標題 共通教材を活用した日本と韓国の教員養成の市民的資質の育成 - 共通テーマによる学習会での学び -
3. 学会等名 中国山東大学国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----